

青雲塾(2015, 2.14)
案内(別紙)
塚口純行氏執筆

□ 茶室

私が住んでいる八尾の家は大正2年の建築で、今年で丁度築100年になる。昭和33年から昭和46年までの13年間は、東京転勤等で住んでいなかったが、生まれてから通算65年間住んでいることになる。それだけに家に対する愛着は強く、子供の頃から、この空地に樹を植えて林の様にしたら面白いだろうとか、いろいろ空想をめぐらせていた。したがって、友達から別荘を買わないかと勧められても、そんなお金があるのなら、この家に投資しようと思っていた。成人してからの私の夢は、家の中にプールと茶室を作ることだった。プールの資料は大分集めたが、最終的には断念した。その代わりに、茶室はぜひ作りたいと思っていた。会社の友人は、殆んどが地方出身者だったので、社宅を出るとニュータウンにりっぱな家を造っていた。私は先祖代々の家に住んでいるので、その必要はなかったが、屋敷の中に何か私の建てた家を残したかった。

昭和59年頃、たまたま大幸建設(株)へ出向していた山本さんと話をしていた時、茶室を作りたいのなら請負ってもいいということになった。場所は前から座敷の西側にある古い便所と風呂場をとりこわして、その跡地に考えていた。古い家では昔、上の便所(客用)下の便所(家族用)があったが、上の便所はいつの頃からか殆んど使わなくなり荒れ果てていた。とりこわすと庭に穴があくので、何を作るのが一番適切かと考えた末、茶室が一番いいのではないかと思った。早速、中村昌生著「茶室の解説」を買ってきて茶室の間取り、茶室の外観、床、天井、窓、水屋等をどうするか勉強した。その結果、間取りは茶室の4畳半と控えの間3畳に水屋を付ける形とした。にじり口は作るが、サッシを入れて出入はできないようにした。私が素案を書いて大幸建設の小森良雄さんに渡し、図面を作ってもらった。小森さんからは計画案がA・B・C3案出てきた。私は茶室のことがよくわからないので、会社の友人の奥さんで、お茶に詳しい井上美智子さんに相談した。井上さんは、彼女の習っているお茶の先生に意見をきいてくれた。その結果、毎日お茶をやるわけでもないのに、住み心地も考えてA案がよいという返事があった。私も茶室風離れ家を基本に考えていたので、南側に広縁があるA案に賛成であった。設計図は昭和59年4月に完成した。そして昭和59年5月26日古い家の取りこわし、昭和59年6月20日棟上げ、昭和59年9月に出来上った。南側に広縁があり、茶室と控の間はフスマで間仕切りをしたので、フスマを取り除けば7畳半の部屋になる。茶室の天井は一般に低いが、居住性を考え、普通の高さにした。水屋はたまたま本にのっていた、咄々斎の間水屋の写真を大工さんに示して、よく似たものを作ってもらったので大水屋である。

私は茶室を作るに当り、間取りをどうするか、茶室の外観をどうするかに気をとられたが、本来、茶室は茶事を催すための施設である。したがって、「待合」から「露地」を通過して「枝折戸」をあけて「つくばい」で用をすませ、「にじり口」から茶室へ入るまでの道順をまず決めてから、それに合わせて茶室を作るのが原則である。茶室ができ上ってからそれに気がついたので、昭和63年2月にあわてて茶庭を作った。大林組に京都の佐野造園を紹介してもらい、四ツ目垣、枝折戸、つくばい、とび石の工事をして、広縁から茶室へ入る道順をどうにか確保した。その時、茶室の天井の蛭釘の方向がおかしいこと等が指摘された。天井の蛭釘は、釜を天井から鎖で下げる時に使うもので、釜の重さに耐えられるように天井に仕掛けをしてある。蛭釘の方向を変えると釜が炉の真中に下りてこないため、天井の工事から

やり直しになる。しかし天井の工事までやると大変なので、蛭釘の向きを変えるだけにした。そのためわが家の茶室ではくさり釜は使えない羽目になった。茶室の名前は、茶名をもらった時、その記念に「八笙庵」と命名した。「八」は八尾の「八」、「笙」は私が長年、生命保険会社に勤めていたので「生」としたが、妻がそれに竹冠をつけた方がいいというので「生」を「笙」にした。字は福島の居酒屋「竹」へよく飲みにきていた、書道家の森小路さんのお父様（習字の先生）に書いてもらった。額は北九州市の木彫師、小林紫峰氏に依頼し、屋久島の土埋木に彫っていただいて平成 9 年に茶室に掲げた。私の夢の一つであった茶室ができた時、茶室開きはどうするんですかときかれた。お茶を習う前に、先に「物」を作ってしまったので、そのような慣わしのあることは知らなかった。

昭和 59 年 11 月の日経新聞文化欄に「復元なった利休の茶室」という随筆が載っていた。その内容は、お茶の世界を全然知らなかった筆者が、「独楽庵」という由緒ある茶室を復元したばかりに、茶の湯の勉強を始めることになり、遂に茶室披露の茶会まで行なった事が書いてあった。

そのためその後、私もお茶を習うことになるのであるが、現在までに一回だけ茶室に人を招んだことがある。日本生命茶道部でお茶を指導しておられた、西川先生の家で、昭和 62 年 1 月 18 日に初釜があった時、二次会に私の茶室へ来られませんかと先生をお誘いした。それからは前にも後にも茶室をお茶で利用したことはなく、茶室開きも未だ実現していない。

(2012/12/29)